

想像と創造

2023.6.13

仕事柄というか立場上、必要があって様々な教育資料を読むことは多い。その中には、「中央教育審議会（中教審）答申」もある。読んでいて気が付いた。「創造」という言葉がよく出てくる。調べてみた。本文と注を合わせると、93回も出てくる。「新しい価値を創造する」というくぐりも多い。

中教審答申は、約10年に一度改訂される「学習指導要領」につながるものである。学習指導要領とは、子どもたちに指導する内容は何かを示すものである。各学校において編成・実施される教育課程の一定の基準である。この中に、創造、すなわち「つくる」が位置付けられている。

なぜなのか。中教審答申には、このようにある。この先の10年、予測困難な時代を迎える中で、子どもたちが仲間と協働して、その時々にな得解を見つけていくことが、人間としての強みになる。予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。

ところが、ここで未曾有のコロナ禍がやってきた。予測困難な10年先どころか、その現実が目目の当たりとなった。誰も経験がなく、対策の正解がわからない。学校にマニュアルがあるわけでもない。それでも、何らかの対応方針を示さなければならない。そんな状況に見舞われた。どうすれば納得解を見つけられるか、その時代が突然やってきた。

今、求められているものに、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善がある。これが簡単ではない。特に、深い学びが難しい。実は、深い学びこそが、創造への一歩である。新たな創造を大切にするならば、指導者の問かけが重要になる。聞かれた児童生徒が、次に進めるような発問力をもつことが指導者には求められる。

導く側に創造力があるか。想像を重ね、創造力に満ちた導きをすれば、子どもたちは、どんどん主体的になるのではないか。それには、指導者が、どれだけ子どもを思えるか。自分の価値観だけでは、様々なマイナス面が出てくるかもしれない。子どもの気持ちを想像できれば、導きの変化もあるだろう。想像が創造につながる。

こう考えると、キーワードは変わってきているが、やるべきことは、そうは変わってはいないように思えてくる。子どもの気持ちを想像してみる。こう聞けば、こう答えるだろうかと、子どもの反応を予想してみる。そこから、子どものつまづきを想定してみる。そして、手立てを考えておく。

昔からやってきたことである。もしかしたら、指導者側の想像力も創造力も低下しているのではないか。今一度、豊かな想像と自由な創造を取り戻したい。